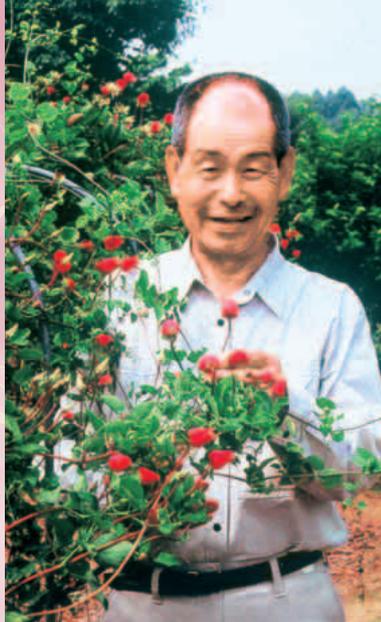


小沢一薫氏が惹かれたその花の魅力を探る

クレマチスに魅せられて

クレマチス育種の第一人者、小沢一薫さんは、クレマチスの繁殖法を確実にすることに成功したことで知られています。小沢さんの尽力なくしては、園芸界にこれほどクレマチスが普及することはなかった、と語り継がれるほどです。クレマチスの父、小沢さんの功績とともに、その美しさをご紹介します。



交配の際に親木として使ったアメリカの原種 テキセンシスと、小沢さん。

クレマチスの育種家として数多くの美しい花を世に送り出した小沢一薫さんが逝って、早8年が経とうとしています。今でこそ、街のおしゃれな花屋で、時折、小さな壺形のクレマチスを目にするようになりましたが、小沢さんは30年以上も前にこの小さな花の魅力にいち早く着目し、その交配、育種、生産に精力的に取り組んでいました。

小沢さんは1922年に川崎市の農家の長男として生まれ、戦後、バラの苗作りと露地切り花の栽培、さらに、シャクナゲ、ツツジなどの花木の栽培を始めました。その後、1950年代後半から約10年をかけてバラからクレマチス栽培へと移行し、クレマチスの先駆者となるのです。

挿し木方法の確立と、育種への取り組み

当初、バラと同じように繁殖は接ぎ木で行っていましたが、立ち枯病が多く発生してうまくいかず、挿し木による繁殖の研究に取り組みました。10年間の試行錯誤の末、パーライトによる挿し木法を確立し、クレマチスの大量生産を可能にしました。現在、これほどにまでクレマチスが流通するようになったのは、小沢さんの功績によるものといえます。

一方で、1960年代からは育種を手がけ始めました。マダム・バンホーテと、ザ・プレジデントとの交配種、川崎や、スター・オブ・インディアと、クリムソンキングとの交配種の、柿生、麻生などは、彼の大輪系の代表作です。しかし、



ろうくち
'籠口'

半木立性。生育旺盛で多花性のため、フェンスなどにも適している。花はつやのある美しい紫。早めに切り戻せば、数回花を楽しむことができる。海外の庭にも数多く植えられている人気品種。強剪定。



おどりば
'踊場'

ビオラとクリスパの交配種。外側が濃いピンク、内側はピンクの縁取りの中心に白い筋が入る。つる性。生育旺盛で多花性のため、フェンスやパーゴラなどでも楽しむことができる。強剪定。



竹間園芸
ちくまのみよし
竹間 幹好

小沢一薫氏に師事し、クレマチスのあんどん仕立ての鉢物生産に従事。ここ数年は、小沢氏の遺志を継ぎ、壺形品種を中心に原種の探求、新しい品種の育種、栽培を行っている。上の写真の品種は'ソフィー'。



アメリカにあるスミソニアン博物館のジョン・ワーダック氏より送られてきた原種のタネが入っていた封筒は、生涯大切に保管されていた。



おしきり
‘押し’

クレマチス・テキセンシスの自然交雑実生。つる性。生育旺盛で多花性。丸みを帯びた大ぶりの壺形の花は人目を引く。外はピンクがかかった美しい紅色で、内側はクリーム色。強剪定。品種登録第8769号。



切り花用のインテグリフォリア ‘花鳥’ を栽培。
ハウスで作業する小沢さん。



はいざわ
‘這沢’

テキセンシスの自然交雑実生。つる性。生育旺盛で多花性。花は丸く愛らしい壺形で、ピンク色から、花の先端に向かって白のぼかしが入る。強剪定。品種登録第8768号。

かきお
‘柿生’

早咲き大輪系。鮮やかで美しい紅色は人目を引き魅力的。海外では、「ピンク・シャンパン」と呼ばれ親しまれている。弱剪定。

③繁殖がしやすいこと。‘籠口’は、まさにこの3つを満たすものでした。

原種の収集を経て、1988年、クレマチス・インテグリフォリアにユニークな形を持ったアメリカの原種クレマチス・レレイキュラータを掛け合わせる事によって、小沢さんの代表作ともいえる ‘籠口’ が誕生しました。小沢さんは、育種を試みる若い生産者にいつも次の3つのことを話していました。①多くの人にわかりがってもらえる花であること、②丈夫で育てやすいこと、

そんな勢いでした。しかし、せっかく持ち帰っても日本の気候に合わず、枯れてしまうものも多数ありました。では交配親にどの原種を使うか？ 優れた原種の選択こそ、育種の鍵を握ると考えていたようです。壺形は暑さ、寒さに強く、赤のクレマチス・テキセンシスがあることから、特にアメリカの原種に魅力を感じていました。当時、親交のあった園芸研究家の平尾秀一先生の手紙により、アメリカ山草会名誉会長ハロルド・イプステイン氏を通じて、スミソニアン博物館のジョン・ワータック氏よりアメリカのクレマチスの原種のタネを入手するという機会に恵まれました。このアメリカから送られてきた原種こそが、その後の小沢さんの育種において、非常に大きな役割を果たすこととなったのです。

品種の固定を図るため、原種を探す旅へ

当時は交配のデータもなく、両親とも交配種の場合、雑種ばかりが出現してしまうため、交配から品種の固定まで長い年月と労力が必要でした。そこで、片親に原種をもつてくれれば固定するのではと考え、交配親とするための原種を探し求めることとなります。

小沢さんの遺志を引き継いで 今も世に出るクレマチス

小沢さんが選別した品種は、その遺志を引き継いだ竹間園芸から、新作として今も発表されています。収集家にとって垂涎の銘花ばかりです。



‘あやめの君’

平成11年に小沢さんによって選別され、その後平成21年春、小沢夫人の名をとって市場に出す。木立性。赤みがかった紫と反り返った白のコントラストが美しい存在感のある花。強剪定。



りゅうあん
‘龍安’

片親をテッセンとした小沢さんの交配種を、竹間にて名前を付けて市場に出す。半木立性。青みがかった紫の花色が魅力。細身の花弁の可憐な花をたくさんつける。強剪定。



うつせみ
‘空蟬’

アメリカの原種クレマチス・アディソニーの実生から小沢さんが選別し、その後平成21年に市場に出す。木立性。グレーみを帯びた淡い花色が魅力的で、茶花としても似合う。強剪定。



ゆづがお
‘夕顔’

‘踊場’の実生から小沢さんが選別したものを、平成19年に市場に出す。つる性。紫から白にかけてのぼかしのグラデーションと優雅に開いた花形が美しく、人気の品種。強剪定。



‘ドクターマリー’

アイルランドのクレマチス研究者Dr. Mary Toomeyとの親交にちなんで名づけた花。木立性。爽やかな芳香があり、花は淡い紫と白のコントラスト、また姿形も美しい。早めに切り戻せば、何度も花を楽しめる。切り花にもよい。(竹間園芸)



‘プリンセスレッド’

アメリカの原種クリスバの実生。クリスバの持つ独特の柑橘系の芳香が強い。花は、ワインレッドのような深みのある赤色。花弁は外側に優雅に反り返り、その色と形は魅力的。切り戻せば、初秋まで数回花を楽しめる。強剪定。(竹間園芸)



‘紫紺’

木立性。‘籠口’の血を引く、つやのある美しい紫色。花弁がねじれたように咲くユニークな形。早めに切り戻せば、数回花を楽しむことができる。強剪定。(竹間園芸)



‘浮舟’

半木立性。淡い藤色のベル形の花。柑橘系の芳香がある。側枝を伸ばして次々と花をつけ、房咲きとなる。早めに切り戻すことによって初秋まで花を楽しむことができる。強剪定。品種登録第20108号。(竹間園芸)

切り花向けクレマチスを育種 新たな活路を見いだす

1989年、クレマチス・インテグリフォリアの切り花生産を本格的に開始しました。当時の日本では、クレマチスの切り花といえば大輪系がほとんどで、最初は下向きの小さな花は、市場から見向きもされませんでした。しかし、日本でフラワーアレンジメントの先駆けとなった高橋英順さんの目にとまり、一躍脚光を浴びることとなります。時はまさに、西洋から入ってきたフラワールーメンジメメント隆盛の時代に入りつつあり、小沢さんの作り出す花は、この時代の要求に応えたものでした。

小沢さんが作出した壺形品種は、先天的に優れた特質、形質を持ったアメリカの原種が、日本の土壌、気候と出会い、小沢さんの手によって見事に結実したものといえるでしょう。小沢さんは「育種は、長い経験と卓越した技術に裏打ちされ、そこへ勘とひらめき加わって初めて実を結びます。人間の考えていることと、植物の持っている生理とが一致すればよいのですが、それがなかなか難しいのです。あきらめずに何にでも挑戦すること、飽きずに続けることが大切です」という言葉を、次世代に向けて残しています。小沢さんは、育種にあたって、色、形、質など、購買層が何を求めているかを常に模索していました。鉢物用、切り花用、フェンス・垣根用といった使用目的によって選別の指標も定めていたのです。

今、私たちは小沢さんが残してくれたクレマチスを維持管理しています。そしてここ数年、小沢さんが生前に選別していた未発表の品種の中から、空蟬、夕顔、若紫、玉かずら、おぼろ月夜、あやめの君などを順次世に送り出してきました。また、一方で小沢さんから学んだことを土台に、竹間園芸オリジナルとして、紫の上、ソフィー、浮舟、紫紺などを発表しています。これからも、さらなる優れた交配親となる原種を追い求める旅と、新しい花への挑戦を続けながら、より多くの人にかわいがっていただけるクレマチスを作り続けていきたいと思っています。



コアクチリス

アメリカの原種。木立性。産毛をまとった、ふわふわとした白い壺形の花は何ともいえず愛らしい。今人気の品種。強剪定。(竹間園芸)

クレマチスの神様と慕った小沢先生との思い出



日本クレマチス協会 理事 明人さん
あきひろ 金子

「小沢さんは僕にとって神様みたいな存在でした。僕からファンレターを送ったのが、知り合ったきっかけです。でも返事がもらえなかった。もう一人の恩師猪野泰三さんにそう報告すると、数日後には小沢さんからわざわざ電話がかかってきて、『遊びにきなさい』と誘ってくれたんです。手紙を本に挟んだまま、忘れてしまっていた、とおっしゃって。初めて川崎のご自宅にうかがった時、幻のテキセンシスをいただきました。欲しくて仕様がなかったから、もう嬉しくて嬉しくて。そこから長いおつきあいが始まりました。いつもニコニコして、優しいおじいちゃんでした。ね。

情熱のある後進の者たちには、偉ぶることなく、目をかけてくれた。僕の切り花の知識に耳を傾けて、切り花向けの育種の参考にしたり、相模原クレマチス会の立ち上げの時に僕に相談してくれたり、頼りにしてくれることもありました。僕もちょっと誇らしくして。小沢さんの家には、本当によく通わせてもらいました。小沢さんが生んだクレマチスの品種は、今も世界中の人から愛されています。『人は死して名を残す』って、こういうことだと思えますね。自宅には、小沢さんから直接いただいた、踊場、籠口、があるのですが、花が咲くたびに『やあ、今年はどうだい?』っていわれるようで、懐かしく感じます」